

III. 様々な石材のストーリー

1. 松江城築城に使われた石

以上の2つの石のほかにも、松江城の築城や城下町造りに、矢田石、**大海崎石**、**いんべ安山岩**、**忌部御影**（花崗岩）、島石などが用いられ、今も見ることができます



松江城二の丸下の段の石垣
(大きく4種類の石で
積まれている)

島石 島石は黒くて気泡（小さな穴）が多くある石材で、大根島（八束町）で採取できる岩石です。来待石に比べて丈夫なうえ、気泡が独特の味わいを醸し出しており、近代以降も基礎などによく使われています。現在でも基壇や石積み、護岸などによく用いられており、特に城下町の風情が残る地域ではしばしば見かけます。また庭石、灯籠等にも使われて



切り込んで積まれた島石の基壇
(島石の上に重なるのは来待石)

おり、建築では日本的な屋外空間のアイテムとして使われています。大橋川拡幅工事の護岸では島石が多く使われているので、川辺を散歩すれば確認することができます。

明治天皇の在所を目的に建造された松江城二之丸の興雲閣では、建物の土台として島石が亀甲状にきれいに積まれています。また、バルコニーやピロティの柱の基礎石にも島石が用いられ、土台が六角形、柱基礎が円柱



興雲閣の土台石積



興雲閣柱基礎石

状に加工された上に縁取りや段など、丁寧に装飾しています。丈夫で、黒地に気泡の模様が見える島石が、建物の風格を高めています。



天守の石垣（矢田石）

がる花崗岩のつながりで、採掘できます。石英や雲母が混成して見た目が美しく、丈夫なため、松平家藩主の墓所は代々御影石が用いられました。当初は著名な兵庫県神戸市六甲山付近の本御影など、藩外のブランド石が使われましたが、後半期には地元の花崗岩が用いられています。花崗岩が風化した部分は、いわゆる真砂と呼ばれる排水性のより砂質の良土として、敷地の造成などに現在も用いられています。松江城下町遺跡でも砂が堆積しているところがあり、その分析によれば、花崗岩由来で忌部周辺から運ばれた可能性が高いそうです。橋北にまで運ばれたのは、それだけ排水性がよく盛土に適した砂礫だったことがわかります。



忌部御影の現代の石垣（東忌部町）

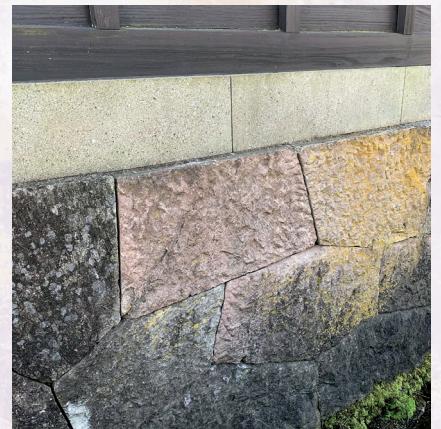
矢田石 現在の東光台団地から大橋川に向けて分布する石材です。松江城の中では天守の石垣のほとんどに矢田石が用いられています。そのほかでも、比較的古い築城時と考えられる石垣でよくみられるため、築城に当たって船で大量の石材を運ぶため、大橋川に面して産出した矢田石が、まず運ばれたことが推測されます。矢田石に堀尾家の家紋、分銅文がよく刻印されていることもそれを示しています。玄武岩質安山岩でとても固く、石垣に適したものだったのでしょう。

忌部御影 忌部御影は、中国山地に広

大海崎石 松江城の石垣で多用されているのが大海崎石です。大橋川の東側に面していることから、船での搬送に有利だったのでしょう。江戸時代の城下町でも利用されていました。やや赤っぽい色で、現在は松江歴史館の基礎の石垣で見ることができます



松江城の石垣
(やや赤っぽいのが大海崎石)



松江歴史館の基礎石垣
(やや赤っぽいのが大海崎石)

忌部安山岩 松江城石垣に用いられている忌部安山岩（長黒石）は、国宝神魂神社本殿の土台や石段、石碑にも用いられています。近年造立された神魂神社社碑の文字を刻んだ部分は新鮮な岩の面が見え、長黒石と呼ばれる美しい黒色を観察できます。忌部地区では、家の石垣などを忌部安山岩で積んでいるところも見かけます。



大庭町神魂神社本殿の
忌部安山岩の基壇

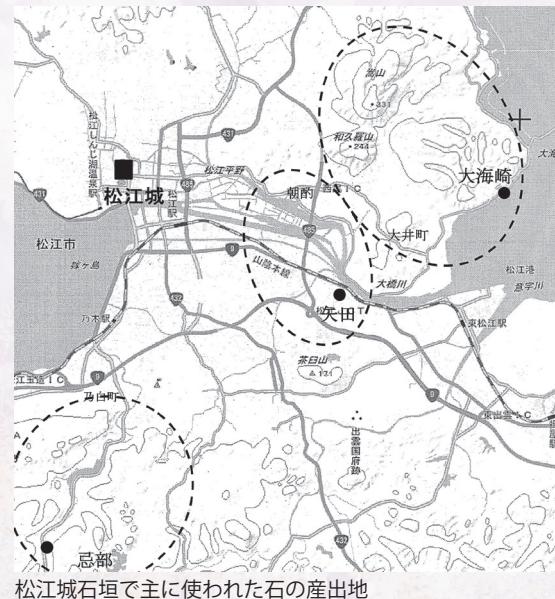


神魂神社忌部安山岩の標石
(風化した面と新鮮な面)

島根県庁は元の松江城三之丸の上に建っています、庁舎北東の庭園隅には「松江城三丸舊趾」の石碑が立っており、その碑の石材は忌部安山岩です。土台は森山石が使われています。



松江城三丸碑
(忌部安山岩、基壇は森山石)

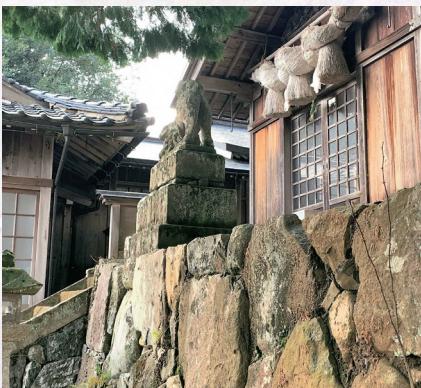


松江城石垣で主に使われた石の産出地

2. 各地で使われた石



柱の基礎は島石、基壇は来待石（法吉町常福寺）



乃白町野白神社の石垣

石の性質で使い分ける 前に取り上げた来待石を含めて、松江城の石垣に用いられたような松江の石材は、それぞれ特徴があり、石の性質や見た目に合わせて、組み合わせて用いられている例も、町上市内各地でよく目にします。



新しい割口でよくわかる忌部御影
(野白神社)



新しい割口でよくわかる忌部安山岩
(野白神社)

前ページの写真の松江城三丸碑は硬くて黒く、重厚なイメージのある忌部安山岩が用いられ、その基礎は堆積岩で年を経るごとに層状に縞模様が現れる森山石（後述）が使われています。建物の基礎石には硬くて丈夫な島石を、基壇には加工が容易で独特な趣のある来待石を使う例もあります。地域地域では、搬入しやすい地元の石を用いることが多いですが、忌部に近いところでは石垣に忌部安山岩と忌部御影を併用することも珍しくありません。赤っぽい大海崎石、黒くて小穴が多く硬くて見栄えもいい島石、黒くて大型の石材もある忌部安山岩、白っぽくて全国ブランドの御影と同様の忌部御影、青っぽく加工のしやすい森山石、そして切り出しやすく、風化によって味が出る来待石、それぞれの特性を生かしながら、近世～近代の石工たちは使い分けをしていたものと思います。



美保関町灯台
(森山石を積んで、のちに白いペンキが塗られています)

森山石 美保関町周辺では森山石と呼ばれる淡い青緑色の凝灰岩が使われており、美保関集落の路地を彩る青石疊通りに主に使われています。また、令和2

年に重要文化財に指定された美保関灯台も、森山石のブロックを積んで建てられています。地域で産し、地域で愛され使われ続けた石です。また、凝灰岩の堆積具合で縞状に見える石塊が、城山松江神社の手水鉢や松江城三丸舊趾石碑の土台にも用いられています。

大芦石 島根町大芦地域で産する閃
綠岩ないし石英閃綠岩です。実態は
大芦地域だけでなく、島根半島東部
各地に分布します。県庁東側の壁
面、興雲閣前の西南の役記念碑、川
津小学校の紫雲丸遭難記念の碑など
に用いられています。大芦御影とも
称されます。

水の浸食は石で護る 松江は水に恵まれたまちです。水は人間の生活に不可欠であると同時に、交通や流通にも大きな役割を果たし、松江の発展に寄与して



発掘調査で現れた宍道湖岸の石垣と
湖に下りる石段（魚町）



美保関町美保神社横の青石畳通り

きました。一方で、水は災害をもたらすとともに、不斷に生活に不都合な働きをします。それは浸食、つまりちょっとした雨でも水は土を流しますし、川や湖は水量を増やし水流を早くして、岸辺をえぐり取り、結果的に沿岸を崩します。

令和3年から始まった大橋川拡幅事業に先立つ発掘調査では、宍道湖から大橋川南岸の水際の様子が明らかになりました。発掘調査では、普通は土を掘っているのですが、水際では石を掘っていくイメージだそうです。つまり、強い流れから岸を

守るための護岸を、繰り返し石垣や石の護岸で修復していく様子がわかつたのです。しかも、石垣の裏込めにはふんだんに石を詰め、宍道湖を埋め立てて護岸や石垣を前面に広げるときは、間の空間は石で埋め立てているところもありました。まさに石でまちを広げているのです。そうした石は、松江城の石垣に用いられた島石や大海崎石などがたくさん用いられており、舟で石を大量に運んだ様子が目に浮かびます。

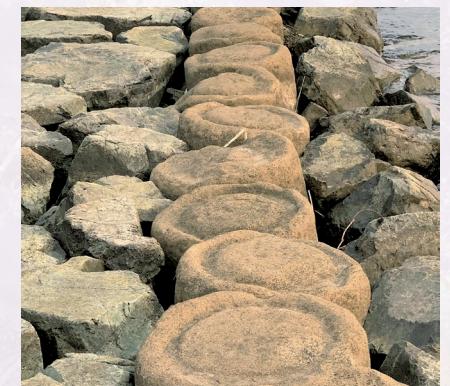
当たり前のように思うかもしれません、近世以前では石が少ない地域では



発掘調査で現れた石を投じた埋立地（魚町）



旧田野医院で見つかった
宍道湖岸に向かう石段



「如泥石」（白潟公園）

木を使って護岸を作っていました。杭を打ち、間に板をはめ込んで、土地に直接水流が当たることを防いでいたわけです。どちらも優れた知恵ですが、石で築いたほうが丈夫で管理の頻度も少なくなることは明らかです。江戸時代の後半ころには、前にも述べたように来待石で「如泥石」と呼ばれる円柱形に加工した護岸用の石製品が大量生産され、湖岸や川岸の強化に使われたようです。

城下町を形成していくうえでも、豊かな石は力を発揮したことでしょう。町を護り、水運を盛んにする堀の掘削はもちろん溝や区画の明示などにも惜しみなく石が用いられました。松江城下町遺跡の発掘調査では、少なくとも17世紀中ごろには、屋敷境の溝も石組で作られたことがわかっています。現在ではU字溝にあたる土を流さない溝の成立です。寺社や有力者の屋敷などにも石垣が築かれ、現在まで残されているものも少なくありません。

また、水運上見逃せないのが、堀に面した舟入で、石を組むことでほぼ垂直に築くことができたことは、石の効用の一つです。近代の旧田野医院の裏では、宍道湖岸に降りるための石段が、主に来待石を組んで壁を垂直に立てて設けられていました。舟で往診をしたというエピソードを裏付けるものです。中世以来、近代まで、前に述べたような様々な石を用いて土地を浸食から守ってきた歴史は、目立たないながらも松江の重要なまちづくりの要素といえます。今後のまちづくりをしていくうえで、豊富な松江の石を利用していくことは、産業振興の上でも考えていく必要があるでしょう。